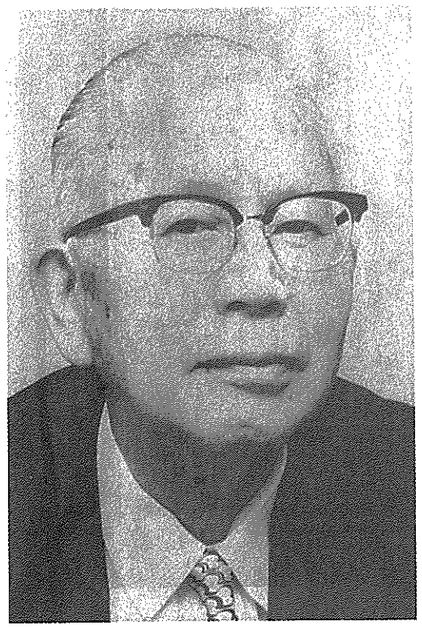
小学生も読める「丹波人物伝」

日商岩井初代社長
日本バレーボール協会会長

貿易の仕事に生涯ささげる

市島町出身

西川 政一



明治32年、市島町に生まれ、日商岩井の初代社長や日本バレーボール協会の会長もつとめた西川政一

明治32年（1899年）、丹波市市島町下竹田に生まれ、貿易の仕事に一生をささげた人物がいます。日商岩井（現在は双日株式会社）の初代社長をつとめた西川政一です。かつて神戸にあった鈴木商店という、貿易を手がける会社に15歳で入社したのが、実社会への船出でした。西川は、仕事で世界を駆け巡る一方で、バレーボールの普及に力を注ぎ、日本バレーボール協会の会長もつとめました。（荻野祐一）

勉強のできる子

西川は、もともと須原という名字で、6人きょうだいの5番目に生まれました。父は農業に励むかたわら、店を営んでいました。いわゆる〝村のなんでも屋〟だったそうです。

竹田小学校時代の西川は、勉強のできる子でした。のちに鴨庄村（市島町）の村長をつとめ、村のために立派なため池を築いた吉見伝左衛門が、竹田小学校で先生をしていた頃でした。西川はしばしば、伝左衛門が下宿していたお寺に遊びに行き、伝左衛門の気高い人間性にふれ、教えを受けました。

ある日、いつものように遊びに行くと、テストの採点を手伝わされました。そのテストは、西川のいるクラスの子どもたちのものでした。今ではとても考えられないことですが、伝左衛門がいかに西川を信用していたかがわかる話です。西川はのちに、伝左衛門のことを「忘れられない恩人」と語っています。

鈴木商店に入社

卒業後の進路をめぐって西川の周囲には、柏原中学校（今の柏原高校）に進学するよう、すすめる人たちもいましたが、家にはそんな経済的なゆとりがなかったため、竹田小学校高等科を卒業すると、鈴木商店に入社しました。入社というよりも奉公という言葉の方がぴったりするもので、会社の人から用事を頼まれると、銀行や郵便局、取引先の会社へ使いに走るという仕事でした。

そんな日々のなか、西川は英語を勉強しようと、夜に授業を受ける学校に通いました。学校から帰っても、復習をおこたりませんでした。

昼間は働き、夜は勉強。日曜日も会社に行って、ひとり、勉強をしていました。そんな姿を見た人が、「我が家で下宿すればいい」とすすめてくれました。支配人として鈴木商店を支えていた西川文蔵です。文蔵は、「本当に勉強する気があるなら、しばらく会社をやめて本格的に学校へ行ってみないか」とすすめました。このすすめを受けて、西川は、文蔵の家に下宿しながら、会社からお金を出してもらい、神戸高等商業学校（今の神戸大学）などで学びました。西川はのちに文蔵の娘と結婚し、西川家に入りました。

日本のバレーボール〝育ての親〟

新しい会社設立

昭和2年（1927）、ひとつの時代を築いた鈴木商店が倒産しました。鈴木商店には、西川よりも12歳年上で、山南町出身の永井幸太郎という、鈴木商店を支えていた人がいました。永井たちは、鈴木商店を引き継いだ新しい会社の設立をめざしていました。永井にすすめられて、西川も会社設立に加わり、同志39人で日商という会社をおこしました。このとき西川は29歳でした。永井はのちに日商の社長をつとめました。

昭和12年、西川はアメリカに住んで仕事をすることになりました。世界一の大都会、アメリカのニューヨークで、日本に綿花や原油などを輸出し、日本から繊維製品を輸入する仕事に打ち込みました。しかし、だんだんと戦争の暗雲がたちこめ、昭和16年、日本とアメリカの戦争が始まると、西川ら日本人はとらえられ、移民宿泊所に収容されました。半年間の抑留生活のあと、帰国が許され、船に乗って日本に帰ってきました。警察にアメリカの様子を聞かれた西川は、年間に500万台の自動車を生産していたアメリカが、平和産業をすべて軍需産業に切り替えたことを話しました。無謀な戦争であることは明らかでした。

昭和20年に戦争が終わりました。敗戦後の混乱期を乗り越え、日本が経済的に発展するとともに、日商も大きく成長していきました。西川は昭和28年、日商の常務に、32年には専務に昇格。翌33年には社長となりました。

世界かけめぐる

社長時代、西川は世界を駆け巡りました。北極と南極以外は行ったことがあるほどでした。朝5時過ぎに起きて会社に行くまでの時間がかろうじて自分の時間という忙しさで、家に帰るのは深夜になるのもたびたびでした。貿易を手がける会社として、世界でもトップクラスの会社にしたいという夢を追い求めたのです。

昭和43年、日商は、岩井産業と合併し、日商岩井として発足。さらに大きな会社に生まれ変わりました。西川は初代社長になりましたが、それまでの仕事の無理がたたったのか、この年、病気で倒れてしまいました。そのため翌年、会長に退き、第一線から身を引きました。常に前向きにチャレンジすること、深い反省を忘れないこと。このことを信条にひたすら仕事に打ち込んだ西川でした。

会長30年務める

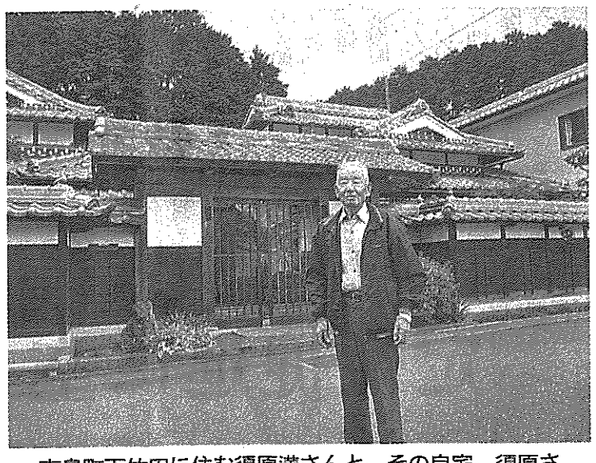
西川の生涯を語るとき、バレーボールの普及につとめた功績も忘れてはなりません。

バレーボールとの出会いは、神戸高等商業学校で学んでいたときでした。昼休みに面白半分でバレーボールを楽しんでいた西川の姿が先輩たちの目にとまり、大正12年（1923）、極東大会に出場することになったのです。相手はフィリピンと中国のチーム。結果は、日本チームの惨敗でした。

悔しくてならなかった西川は、雪辱を果たすには国民の間にバレーボールを広めることが必要と、関西排球協会をつくりました。西川の自宅に事務局を置き、みずから機関誌を編集・発行したり、外部と交渉する役割をつとめました。関西排球協会はのちに今の日本バレーボール協会へと発展。西川は昭和23年、同協会の会長に就任しました。

昭和39年10月23日は、西川にとって忘れられない日となりました。東京オリンピックで、日本の女子チームが金メダルに輝いたのです。西川はその感激について「極東大会で味わった無念の思いが一度に晴れた」と語っています。

西川は日本バレーボール協会長を30年間もの長きにわたってつとめ、日本のバレーボールの育ての親といわれています。昭和61年、86歳で亡くなりました。



市島町下竹田に住む須原満さんと、その自宅。須原さんは西川政一のおいに当たります。西川は、この家があった所で生まれ育ちました。須原さんによると、西川はふるさとを思う心が厚く、毎年夏に開かれる竹田小学校の同窓会には必ず出席していたそうです。また、帰郷した際には、担任だった吉見伝左衛門や、鈴木商店への入社をすすめてくれた当時の竹田小学校長、西山作右衛門のお墓に参っていました。